97
353

026681-000-1

97-353

満洲画韻

樋畑　雪湖／著

M39

ADD-0372

97
353

滿洲畫韻

梱畑雪湖著

東京　文武堂藏版

紀元二千五百五十年

97-353

日露戦争
維明治卅七年十二月動員の命あり。軍に從
て。滿州の野を跋渉する實に七閲月。南
の方大蓮金州より普蘭店復州大石橋營
口等を經て北の方遼陽沙河に及ぶ。西奔
東走馬蹄到る所約百數十里とす。間々眼
界に入るの風物は之を描寫し或は所見
を錄して終に一册をなせり。此書素より

明治
39 5 9
内交

滿洲畫韻

詩畫的滿州

樋畑雪湖著

人は云ふ滿洲の風物は總て無味干燥なりと、余はしか感せざりき、否曾に感せざるのみならず風景の大に詩に入るべく畫に入るべき趣味の存するを覺ゆ上陸後直に眼に入りたるは大陸の風色で、十里平原隔市塵、幾家村落少人烟、の所滿目唯草や高粱の芽が美しき綠色

河東に於ける遼東のゐのこたるに過ぎずと雖も。他日の紀念として鉛槧に附することゝしたり。看者胡盧することなくして謬見を訂す所あらば。著者の望み足れりと云爾。

明治卅八年十二月七日滿州軍總司令部凱旋の日淺草之寓居に於て

樋畑雪湖識

をなし、砲車や輜重車や支那馬車の轍が幾條となくうねゝと其線の間を強き代赭色の線を描きてゐる所は如何にも濃厚でそして強き色である、日本の如くくすんで落着た色とはまるで違ふので、平素強過ぎると思てゐた支那繪の具の白綠や綠青、群青と云ふ樣な派手な色を用ゐて描た青綠山水が誠に寫生で其色の適してゐると云ふことを始めて悟りたるのである、

曾にそれのみならず山の脈絡や巒の形勢が如何にも支那の畫法畫論に符合してをるの一事である、たとへば王維や馬遠夏圭の描き出したと云ひ傳ふ披麻皴や斧劈皴はさらなり彼の遼陽の戰爭で有名な首山の如

きは、披麻間斧劈、荷葉、折帶、雲頭、解索、の皴法を盡く網羅して居る、殊に余が南山陷落後第四日目であつたが河口と云ふ所より金州河原に沿ふて大房身より柳樹屯に赴く途中端なく其河岸の土坡中より現はれて居る岩石の尖頭が幾多の雲頭皴をなして居るのを見て、めづらしく感じたので此岩石は仙蓬附近、及信濃の諏訪湖附近にある薄く剝げる岩のたちで、岩面に幾條となく筋がはいつて居る其筋目がだん〳〵と水勢や何にかの關係で岩頭より次第に蝕損してくるから雲の渦卷く樣な形狀に變化するのであらふと思ふ。

○歩迷芳草徑、車駐綠楊陰、と云ふ樣な按排で、樹木と云

へば柳と李との外はあまりない、到る所の村名が李家屯、柳樹屯、楊家溝、と云ふ類が多きにもしるべきである。

○春のもゝ草秋の千草は我國に比し其種類其形狀概して同一であるが只其色が前にも云ふた通り濃厚で、殊に春草の萠へ出る色の鮮やかなるは一しほにして花瓣は大きくして且つ厚き樣に覺ゆ。

五月廿六日金州に赴きけるゝき途上のぬた

がある。

駒とめてしばしやすらふ柳蔭
もゆるかのごとあそふ絲ゆふ

五月の遊絲季題に入らぬかもしれぬ、されど余が上陸

した頃は全く春氣色であつて、つくしたんぼゝのまさかりで柳が芽ばり高きびが二寸程のび出た開割二葉の頃であつた。

○八月廿二日海城々内中央の丘にある文廟に詣す、一望全市街を下瞰し城壁を隔て河川の流れ、唐王山の砲壘、黍圃中の狼窪、掩堡等戰線の形狀が歴々として指點の間に在り、以て當時凄愴の狀を想起せしむ、海邑文廟碑の錄する所によれば此の廟宇は雍正七年平南親王第二十三子佐領向の再建する所とあるから今を距る約百三四十年前に於ける清の五世々宗の時にあたる、雍正帝は康熙帝と乾隆帝との間にある名主で此の三

代は文藝が盛んに興つた時代と云ふことである、廟の構造は彼の朱舜水の指導の下に成つたと云ふ御茶の水の聖堂(今の教育博物館)と其趣を同うす、彼は碩死の彫刻を以て裝ひ、我は木材の彫刻を以て飾るの別あるのみ、廟中には孔夫子歴代の位牌を安置す其前には香爐其他釋奠にでも用ゐそうな麁末極る二、三の祭器らしいものがあるに過ぎない、廟の階下に庭あり蒼松や寶塔が古色を帶びて配置せられてあつて夏草の盛んに叢をなしてゐるなど出征中庭らしき庭を見たのはこれが始めてゝ正に之れ：

「立よりてしばし憩はん古里の庭の松にも似たる下

かげ」の趣があつた。

○爾雅に土高有石曰山兵に然り又曰く山有草木曰岵山無草木曰𡸁と遼東の山には草あれども木無し是れ岵にもあらず𡸁にもあらずといへど、芳原綠野恣行時、春入遙山碧四圍と云ふ樣な所ばかりにて山の中腹に古塔の崩れかけたのや一宇の佛閣がほのみゆるなぞは澤山ある靈巖有路入烟霞の趣があつて王石鶴の山水其儘だ。

○ましろなる綿羊の一群と眞黑なる山羊の一隊とを一所に連れて二、三の牧童が詩を踏てあちこちに逐ひあるく樣は舜擧の筆にものぼらぬ圖であるが色の調

和が中々に面白し、そして無心の牧童は正に之れ金の段成己が「綠陰深處戲童兒牛自東西兒不知休說兒狂無伎倆人間何事不兒嬉」の詩趣さへ添景されてある。

○牧馬は到處に多し之れも亦青草繁き山の頂や谷のあなたに遊び狂ふの狀は古法眼の春郊滾馬圖を見るこゝちす。

○鴉は牛莊や遼陽には栖で居るが大石橋以南金州方面にはあまり居らぬ其の代りに此方面には鵲が澤山栖息して居る之れは例の沈南蘋や方西園か長崎で得意にかきのこしてある喜鵲であつて一寸面白き畫材の一であらふ。

○蕎麥の花は海城より西方の村落で一度見たばかりであるが白居易の「獨出門前望野田月明蕎麥花如雪」の句趣を想起せしむ曾て信濃なる戸隱山に蕎麥を賞した事迄も聯想したのである。

○蛙聲、これはあまりうれしくない、そのくせ夢回青草池塘上、疑在春風皷吹前」なぞと蛙聲を馬鹿にほめてあるが呼名徒自喜と云ふ何の方が本統だ、滿洲に於ける蛙聲は我國のよりも優長で、そして踏みつぶされたやうないやな鳴聲だ、西行法師が「眞菅おふるあら田に水をまかすればうれしがほにも鳴蛙かな」と云ふ樣な感想はとても出て來ない、齊の孔珪が皷吹に當つと云ふ

て愛して居たのもつまり痩せ我慢から出た不平の聲でがなあらふ。

歴史上より見たる滿洲の驛路

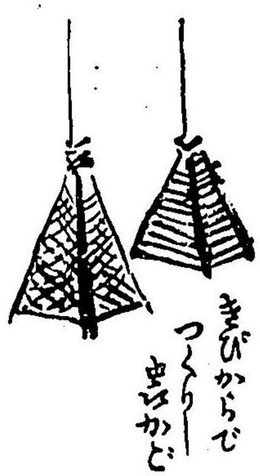
白居易の詩に從陝至東京、山低路漸平、風光四百里、車馬十三程、とあるのを思ひ出して三十里に一驛を置きたりし制度の今も尙ほ殘りしかの如く感じた、大學衍義補に凡國野之道十里に廬あり廬に飲食あり三十里に宿あり宿に路室あり路室に委あり五十里に市あり市に候館あり積あり云々（委積とは驛傳の給廩にして候館は郵亭なるべし）委積以待賓客など云ふから丁度德川時代に於ける宿驛の

本陣とか問屋とか云ふものゝ如く幕府の役人や諸侯の參勤交替の爲めに設けられたものと同じ格のものらしい、而して淸の三十里は我四里三丁三十間にして大概街道には四五里を距てゝ一寸宿驛らしきものがある、十里乃至二十里を距てゝ金州とか蓋平とか海城とか云ふが如き物貨の聚散地にして淸國官憲を配置したる城市がある、又宿驛と宿驛との間にも人馬の休憩に供すべき馱菓子屋、饅頭屋（饅頭は旅行者、馬子、人足共の一般豐食である）木賃宿の類（宿屋は沙て木賃にして旅行者自ら炊くなり）が設けてあつて、假令ば海城と遼陽との間には甘泉堡、鞍山店（今は廢驛）、沙河鎭の宿驛あり其間に新臺子、楊家堡首山堡の

村落あるが如し。

欽定古今圖書集成の載する所によれば康熙帝の時代に於ける鋪遞の設備は一鋪（鋪と舍とは同じことなり）遞きも一、二十里に過ぎざるも奉天所屬の縣地擴く民稀なれば近者三十里遠者五十里に置く山を云へり而して其鋪名の中には現在の大石橋鋪、老邊鋪、狐家子鋪、十里河鋪、沙河鋪、鞍山驛鋪等の驛名を錄し一鋪に鋪兵一、二名又府に十三名遼陽州に八名海城八名蓋平五名の兵を置て公用遞傳の監視に當てたるものゝ如く更に遡りて遼時代を按ずるに此時既に驛傳の制度發達し上京（五京の一）臨潢府南門之西南同文驛に諸國信使の旅館

を設け又西南臨潢驛に夏使、中京大定府大同驛に宋使、朝天館に新羅使、來賓館に夏使を待つたとしてある。此時代の外交は中々馬鹿に出來ぬもので盛況を呈してゐるではないか。爾來宋金元等幾多の時代を經て長白山の愛親覺羅氏は寧古塔の南西に居を占めて



ゐた所謂寧古塔具勒と稱したものだが終に滿洲諸部を一統し南の方明軍を破り都を北京に定めし以來僅に瀋陽に墳墓を存するのみにて、あはれ賓客を待つの

必用なく、人馬の往來も次第に減じて宿驛も廢れたので人烟稀少、寂寥不毛の今の有樣となつたので、群勇割據時代の滿洲こそ却て盛んであつたらふと思ふ。

因に云ふ大石橋と海城との間に他山鋪と云ふ村落があるが、之れは鋪舍のなごりであらふ此類の地名外にも多くあるべし。

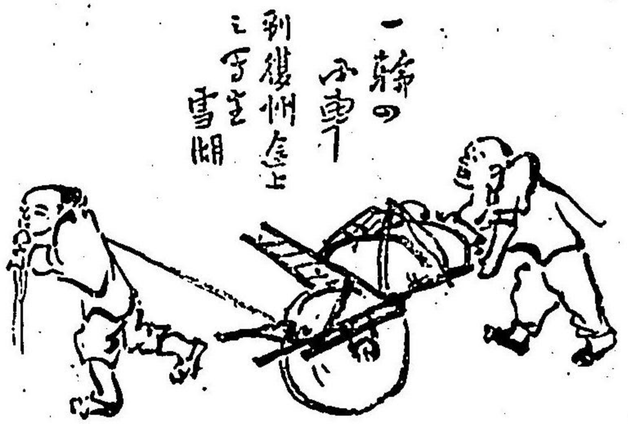
本文上京の事で思ひ出したのは、遼陽の東方太子河を隔て約一里の所に丘陵がある、丘上古松の一株が如何にも風趣の掬すべきものだ、此地を字して墳上と云ふ、地圖には多く唯東京と記してあるが、此地を土人は東京陵（トンキンリヤン）と稱してをる之れは金遼時代の五京

の一であることは疑はぬのであるが或は遼の慕陵ではあるまいか、九月十三日余が第一軍の司令部に加藤氏を訪問したとき不計同地に到りたので、引込でゐる所だから、一寸人の氣附かぬ地である。

橋道

道は踏なり路は露なり人踏て露るゝ所と昔よりの定義としてゐる程ありて車の轍と人馬の足とで踏みかためたのが支那の道路で水を疏すれば渠自ら成ると、すまし切て水の流れ次第に任せてあるのが河渠である、道路の修繕、河渠の浚渫と云ふ樣なことは北京、天津

と云ふ眼拔の都會でさへ行はれて居らぬからまして遼東の野に是等の事が行はれ樣筈がない、昔し堯の時大洪水があつて鯀と云ふ人をあげて水を治めした、所で九年程たつてもまだ其工事が更に効が見えなかつたので舜がおこつて其人を羽山と云ふ所に殛し其子の禹をして業を續かした、すると禹は父が功成らずして誅を受けたのを大に傷みて躬を粉して工事を督し家に飯らぬことが十三年で漸く成功を天下に告げたと云ふことだが爾來今に到るも、こんなことに意を用ゐた人はないと見える、只邊境を侵されようとか泥坊には入られぬ樣な個人主義な考のみに工風をこらし



て長城や長柵の樣な工事が發達したのみであらふと思ふ。

道路は家の敷地や畠よりは一段低くなつてゐて雨が降ると道これ川で古語に大平を謳歌して雨つちくれを破らずと云ふ事があるが吾人は之はあたりまいのことゝ思ふて居つたが支那では雨が塊を破り通しであるから

之れが破られぬは成程稀有な事としてあるのも道理至極と感じたので就中驚たのは雨後になると常に外出したことなき村中の婦女子が總出で道路の泥水の流に臨んで平素ためてある汚れ着物を石にたゝきつけながら洗濯しつゝあるの一事である之れは余が六七月の候、大連、金州、附近の村落や鹽大澳や普蘭店に到る各地の村落で屢々實見した所でその理由は河川の常に水なく只僅に井水を以て飲料に充つると云ふ極めて水拂底からではあるが日本人にはとても出來たゞではなひ、二日も雨が降ると遼陽でも、牛莊でも深さ一尺以上もあらふと云ふ於汁粉どろ〳〵の街と化す

るのである。

川に水の無いと云ふのは遼東の山に樹木が無く從て水源を涵養することの出來ないのに原因するので太子河、沙河、遼河等平素水のある河は重に北方樹木多き山岳に源を發するのである。

橋梁のあるは概して市街地と其の入口とかのみで奉天街道の河にも橋を架けてある所は見たのは板橋堡より八家子に到る途中位のものであまり眼に入らぬ之は平素水のないのが第一の原因なるべしと雖も木材の不足の爲めに木橋を架することを知らないのではあるまいか稀にある橋は總て八ッ橋流の石橋のみ

僅に幅が二尺位で長さが六七尺もあるかと云ふ石を二三枚架けて大石橋と云ふ地名を冠するのでも知るべきである。

雨は六月の十一日より同廿七日の間に八回(蔡家屯にて)七月七日より同廿六日の間に八回(普蘭店にて)八月二十三日より九月十三日の間に六回(大石橋にて)十月四日より同三十一日の間に於て四回(遼陽にて)と云ふ様な割合で其内最も雨量の多かりしと思ふは六、七両月である此雨多き時に於て普蘭店より復州同所より溪澗を渉りて得利寺、熊岳城、方面又蓋平より大石橋、大石橋より營口を經て海城に到る等山家水村原野の間

を跋渉したのであるが其の川の如き道路、沼の如き島、橋のなき川は實に内地に於て想像の出來ぬ所である幸に乘馬の恩惠によりて此任務を果すことを得たのであるが軍事教育の素養なき僕等には中々の困難で其の木曾義仲粟津の場を演じたのは幾回であつたか殆んど記憶の出來ぬ程で一番樂であつたのは鐵道線路の上をあるくのであつた。

前叙の如き實況であるから兵站輜重の任務と云ふものは實に容易のものでない此の困難なる道路と戰鬪してゐる兵站司令官及兵站各部の將校兵士や輜重輸卒や監視隊の人々が前線に向て遺憾なく糧食や彈藥

の輸送をしつゝあるの功は實に宏大と云はねばならぬ否戰鬪以上の勞苦と勇氣とを有するものと信じて疑はぬのである。

石敢當

九州に行くと今でも殘て居る處の石敢當と彫刻してある石碑は遼東に於ても屢々見るのであるが矢張居民が其來歷を知らぬと云ふことは我九州の人々と同一だそこで此碑は一寸簪を連ねた小街の辻とか町の衝當と云ふ樣な所に建てゝある而して其形ちも略ぼ我國の分と同一である此の石敢當のことは好古小錄

や桂林漫錄にも出てあるが石敢當は五代の時劉知遠が用ゐたる勇士の名にして人々敢て當るものなし故に後世其像又は姓字を石に刻し橋路衝要の處に建たるより始りたるものらしい古人詩あり曰く

甲冑當年一武臣、鎭安天下護居民、捍衝道路三叉口、埋沒泥塗百戰身、銅柱承陪閒紫塞、玉關守禦老紅塵、英雄來往休相問、見盡英雄來往人

此種の碑我九州にのみありて他になきも蓋し支那貿易商人等の建設したるにはじまりしものか識者の教を俟つ。

此他に殆んど每村落にあるは勅諭とか叡旨とか書し

てある孝子節婦旌表の碑愛染明王的の小なる石の祠と、そして天柱とかなんとか云ふ幟竿の如きものが村の入口に設けあるのである。

車馬

車轍の巾は五寸程もありて頭の三寸もあらうと云ふ太き鋲を以てすき間もなく打込ある車輪を以て馬と騾と驢と牛とを四頭にて曳かせユー、ユー、アタ、アタ、アタ、と云ふ樣なかけ聲とパチリ々々々と長き鞭を鳴して四種の動物に同一歩調をとらする所の御者はおそらく支那一流の藝術にして他にはあるまいと思ふ此

道路にして此馬車あり、されど此馬車ある爲めに我軍隊輸送にどれ程の便宜

を得たか知れぬのである。

騾馬は驢と馬との間に出來たもので、其體軀は驢よりも大にして且つ力も勝りて至極柔順に輓馬に適したものなり但し其嘶く聲はキー々々と云ふそれは〳〵何とも云へぬいやな聲だ、或人は之を以て亡國の聲と言たがそんなものかもしれぬ。

人の乘用すべき馬車は彈條の設備もなくして、其車輪の厚さも前に述べた荷馬車と著しき差異がない、其乘り工合と云ふものは、我國の圓太郎馬車(マルタロウバシヤ)どころの比でない、跳梁軒輊將に覆へらんとすること幾度であらふ到底吾人の耐へ得べき所のものでない、されど深窓の

佳人や府の令尹殿が得意顔して乘て御座る所は何となふ昔の繪卷物にある唐車(カラクルマ)或は檳榔毛(ビンロウケ)、庇車(ヒサシクルマ)などのおもかげが忍ばれるのである前に反して乘馬は中々工合のよきもので其乘馬用の馬は丈低きく尻太き白毛の

もの多くありて小股でチョコ々々と歩むのである
が細き畔道を驅する事や泥土の間を馳することは馴
て居るせいか極めて巧みである。
今一つ驢馬に乘てあるく者を往々見る所であるがこ
れは多く人品の卑しからざる輩で必ず可憐なる十四
五の兒童を馬丁として供してゐるそれが後方より小
さき鞭を馬にあてつゝ扈從するの狀を近くしては舜
擧の密畫遠くしては梁楷の一掃畫を看るこゝちす。

雷鳴

七、八月の候に於て俄に途中で雷雨に遇ふことが度々

ありたり之れが我國の如く山や森の間にある辻堂或
るは村社の拜殿にあまやどりして青々として稻田を
眺めつゝあるのは中々にこゝちよきものであるが黄
蘆萬丈見わたすかぎり山もなく川もなき所謂居隆が
野曠天低日欲西と云はしめたる所の茫々たる野原に
於て此の急雨と雷鳴とに出あひて土臭き香を嗅ぎた
る時の心もちはあまりよいものでない余一日鞍山店
に到る途次雨中の吟とても名づくべきか馬上の腰折
が一つある。

うちなびく雲の旗でも見ゆるかな
おづゝに似たる鳴神の聲

百二十度の暑氣に鞍甕より取出したるゴム引の雨合羽を着た時のくるしさは今なほ忘られぬのである。

温泉

火山脈は此地にも渉てゐることは地理書の示す所なるが玆も亦其脈なるべし熊岳城より程遠よらぬ三道家大道と云ふ所を發して南の方萬家岑に到るの途中龍門湯なる所あり左右の柳堤盡くる所に小河あり河邊の一部尺許の白砂を穿つときは忽ち所在に溫泉涌出す通行の兵士輜重の輸卒等かたみに銃劍を交又し戎衣を脱して三々五々勞を醫し汗を拭ふの爲めに浴

みするものあり、又熊岳城より二丁許を距て熊岳川あり河邊にも亦溫泉涌出す此所には露人の建築した る浴場あり、八月五日此地を過ぎて一浴を試む、少しく硫黄の氣あるも甚しからず入りこゝちよく吾人をして誰か知、寂莫千秋、後留與行人洗路塵と唱さしめたのである。

建造物

土人の家屋の極めて無造作のものあるがそれで保つて居ると云ふ事は第一粘土質にして地盤の堅きと今一つは大平洋沿岸就中支那海日本海の西岸一體の地

は地震がないと云ふことも此建築法の上に古來より關係を持つてゐるらしい。

土人の家屋を甄別するときは左の三種となる。

(一)煉瓦と石とを以て建築し梁柱に彫刻ある磚甓を鉾め壁に壁紙を貼り又は漆喰を以て塗り屋根は瓦葺とし棟に龍形を我鯱の如く附したるもの

(二)煉瓦又は石とを以て建築し茅葺として草蓬子と稱するもの

(三)石塊を我石垣の如く粘土を以て築きあげたるもの若は粘土に少しく海草を入れ煉瓦石の如き形とし日光にて干したるまゝ燒かずして泥土にて

つき立て家根も兩三箇の丸木を横へ其上は高粱の殼を敷き而して泥土に海草等を交せて塗りたるもの

第一は市街又は富豪寺院等の建物に多く、第二は普通の居宅に多し而して茅葺は大石橋以北に見ることを得るも蓋平金州方面等南方に於ては極めて少ない、第三は極く下等なる民家の構造にして鹽大澳より貔子窩、普蘭店、金州等に到るの途次に於ける各村落は大概此三に屬する建築が多きを占めてゐる而して北方に赴くに從ひ民家の結構が自ら大きく且つ高く成りてそして其南に面する窓(窓戸)が全然

廣く且つ多く構造が其趣きを異にして室内が何となく開濶してゐるのでどこか我國の建築に似よつた所があるやうに感じたのである。そして窓は障子ばかりで雨戸はない。

火床（炕）

之れが毎戸否毎室皆設けてあるが寒國には極めて適當の設備であつて我國の炬燵よりは餘程進歩したものであるから木造家屋に適當する樣幾分の改良を加へ我東北地方の農家に應用したならば衛生上は勿論蠶仕事や織場や養蠶事業にも園爐裏の端

に集會がなくなつて經濟の上にも尠からぬ利益があるものと信じて疑がはぬのである。聞ならく支那には子宮病の類を患ふる婦人がないと云ふは此溫室の利益だと話されし軍醫殿もあつた。我國にても曾て北海道に此法を採用するの企があつたらしいが經費の爲めに沙汰やみとなつたとのことであつた。其燃料の如きは可成火力の强からぬ方がよろしくして一般に黍がらを用ゐるのが通例であるが町家では粉炭を炭團の如く丸めたのを使用するのを遼陽邊では認たのである。であるから、我國の麥からの蕎麥殼、豆殼、綿殼、麻幹、は勿論落葉等の燃料は自由自

在のものであるから薪炭に煖を採るより餘程の經濟になるものだと思ふ。

圊（茅厠）

上陸後初の宿營が土人の門廂であつて其裏方には豚と牛と驢と騾子と同栖の棚（小屋）に隣りて、そして土間に黍捍を敷きて起臥して居ると云ふ有樣である這は素より陣中の事で、かねて覺悟の前であるから別に驚かぬが一寸閉口したのが厠なので之は屋外に方五六尺もあるかと云ふ極めて淺き穴を穿つて其所に丸木二三本を横へ其上に手頃の平つたい石塊を千鳥形に

並べてあつて其石と石とに跨てなんするのであるが屋根もなく壁もなく所謂門戸開放、青天井であるから晝間の溜所通ひは吾人にとつて一寸躊躇する所である所が土人は一向平氣でやつてゐるが婦人はさすがに便器を用ゐて居て此所に來ぬのは此の無智の土人としては見識な者で我國農家のたち小便嬢に比すべくもあらぬ風習ではないか、そこで此の黄金堆所は日光になどりなく照らされて干燥すると今一つは毎日の樣に其上に土砂を散布するから初め思ふた程の臭氣も無く殊に此の黄金と土との混淆物は毎月一回乃至二回犁鋤にてきれいに掃除せられて一定の堆積所

に持去られるので、そこで此の汚物を能く干燥し鍬柄の如きものにて粉碎するから恰も土と異らぬ迄になる、かくして後黍畑や其他の隴圃に散布して肥料と爲すので此點は寧ろ我國の農家のやり方より至極清らかで臭氣もなく取扱にも簡便で說文に廁は淸也とあるもあながち唐人の駄法螺でないかの如く思はれたのだ其當時知人に贈りたる狂詩あり曰く、

無蓋壁廁是國風晝間施行少故窮多待夜間濟用事殊
或迷惑在雨中

各房

婦人(娘兒們)の居室(屋子)は其入口の戸(屋門)を堅く閉ぢてあつて間々芝蘭室等の扁額を掲げてあるものを見た此室へは知人の間にありても猥に入ることが出來ないのは古來より自然の制裁であつて此の風習は片田舎の極めてまづしひ土人の家にも嚴しく行はれてゐる、もしも他人の徳て此婦人室に入りたならば殺されても仕方がないと云ふ掟であるとのことだ此等の習慣を無視せぬ樣各司令官から配下の部隊へは懇ろな訓諭があつて、我兵士の孰れも靜肅で秋毫の微も犯すことなきはさすがに仁義の軍だと土人もひどく感じてゐるものがある。

寢室(臥房)に寢臺を設けたるは餘程大家の主人の居處でなければ備はつて居らぬ此の構造は恰も船中の寢臺の如く純子の緞帳が前にあつて室の正面に一段引込で戸棚の樣に且つ門徒の佛壇を見る樣であるのはどうやら日本の床の間の本家らしく感ずるので清國よりの留學生が下宿屋の押入を寢臺とまちがゆるのは無理のない事である而して家人の多くは例の火床の上に黍稈のあんぺらを敷き其上に毛皮又は薄き蒲團を敷きて臥すのである中以下の家には寢臺を設けた所は概してない。

厨房は大家では別になつてゐるが中以下では多く中

央入口の左右に大きな竈(ツンテオ)が二個づゝ築きたてゝあつて其れが窓の奥の孔が椽の下に串通してある之れが例の前に述べた火床の火口となつてゐるのである故にこうゆふ風な家に宿營すると朝晩飯を炊くから夏でも座臥して居る下か温たまつて來て頗ふる閉口したのである、此竈には大釜(ファンクオ)か一個づゝかけてあつて毎日粟のどろ〳〵した黄色の粥を焚て食するのが普通で其釜の形狀は我國の豆腐や、蕎麥や、菓子やで使用するものと同一なり。

庭(ツン)(院子)には花壇を設け小許の草花を植たのはあるが多く盆栽棚より外にはない、それが金州とか遼陽とか

云ふ都會の可成な家なので庭園と云ふものは此地方では見たくも無い前に述べた通り只海城の中央にある高丘の聖廟に石や樹木を集めて一寸した庭園らしきものを見たばかりて其外には露國式のものばかりであつた。

門は田舍も大概の家には必ずある其構造は重に日本の長屋門と云ふ樣なもので其門扉は閂で兩方に開くので扉は多く楊樹の一枚板其表面には梵釋四王の立像か着色で畫いてあつて（下等になると紙に印刷したのを貼付してある）左右の柱には立春大吉萬事亨通の八字を隸書金摺の大きな紙札で必ず貼付してある、始めて見たときは寺かなにかの如く感ずるので其の剝脫した佛像畫には大阪天王寺にて河成の筆だと云ひ傳ふ名畫にも髣髴した所がほの見えて面白くまた村夫子の門扉などは稀れに洒落た句が書たのもあるが概して云ふときは極く俗な芽出鯛語が多く士農工商必ず入口に貼付してあ

るのが、前の立春大吉萬事亨通の聯で之は毎歲立春に貼替ゆるとの事だ我國の禪宗寺にのみ此札があるのも面白ではあるまいか、此の立春には門戸ばかりでなく各室內へ色々な慾張文句を紅箋紙に刷たのや五福來集的の極めて疎末な錦繪樣のものをべた〳〵貼付るのだ之れは隨分需用の多きものであるから我國よりも美麗で安價に印刷してどし〳〵輸出したらよからうと思ふ、或る商家の扁額と聯とにあつた慾張文句の內で記臆して居るのは左の句で他はおして知るべしである。

富致陶朱(額)經營不讓陶朱富貨殖何妨子貢賢(雙聯)

招牌

是れが中々美事なもので其大體の圖案は萬籟一律で

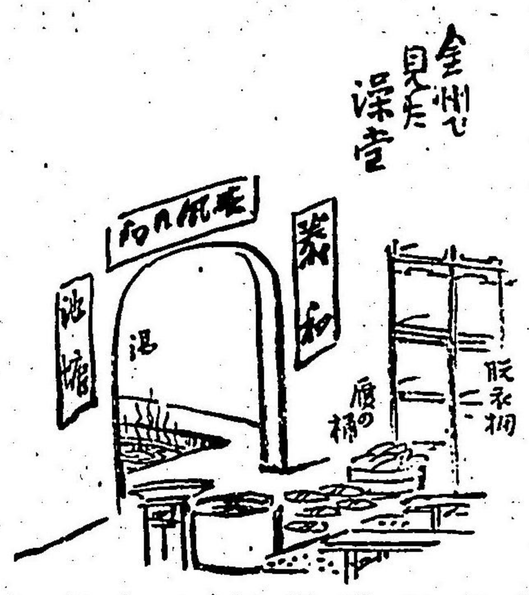
はあるが中には其意匠と云ひ彫刻と云ひ頗ぶる的見るべきものがある大約は挿圖に示す如くで營口とか遼陽とか其他の城市は勿論連擠僅に十戸に過ぎない極めて小さな宿驛でも必ず二三燦然として人目を惹くべきものがあるのは實に意外で其の如何に商業に注意の周到なるかを窺ふに足るのである。

浴湯（澡堂）

湯屋は先づ三種程ある(一)支那風の一人入の風呂(二)俄國風の西洋風呂(三)普通の混浴で、此混浴は我國の錢湯と略ぼ同じ事で所により多少構造が異れるとも概ね

大同小異であつて其不潔は到底吾人の堪ゆべき所でない、余が或る時金州城内に一泊した朝早天一浴を試みたことがあるが其模様は左圖の通りで頗ぶる我國の物に髣髴してゐる先づ第一に脱衣棚の按排それから洗面器、浴後の腰掛、そして其室のすみに髪結が詰てゐるなどは用意周到と云はねばならぬ、一寸氣のきいたと思ふのは信實の繪師草子にでもありそうな板草履を備へてあつて、脱衣場よりたゝきの流しを通りて浴槽へは之を穿て往き來するの一事である(一浴金五錢)、二種のものは沸湯を盥へ入れるので普通の西洋風呂と略ぼ仕方が同一である(一浴十錢)。

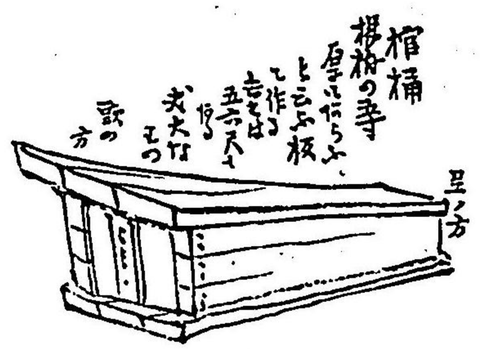
上陸當時の如き海邊の露營や片田舎の村舍宿營にて潔癖の大和民族は湯に入らずには居られぬ尤も碇泊場司令部、兵站司令部などでは据風呂の備へもあるが其他の部隊では種々の方法を講じて浴を取るが中々に奇談がある就中多く行はれたのは土人の家に



水を貯へ食物を入れて置く大甕を借入れるので其甕を夾ば土中に埋て其内に熱湯を注ぎ浴するのである一日蔡家屯の宿營で我儕の一行が例の甕を借り來て愈々浴場を出來せんとするとき生憎や從卒の一人が徳て甕の眞中に鍬の尖頭をあてたのであはれ胴腹に一の孔穴を穿つた、すると持主が之を見附て大怒りに怒つたので終に村中の騒ぎとなつてとう〳〵通譯官を煩はしてからに其破損の過誤であることを辯解して貰ひ幾分の償金を出して局を結んだことがある聞けば此甕は十二三里もある金州城内にゆかねば購ふことが出來ないと云ふ彼等に取りては得がたき品で、

しかも日用缺く可からざる要具の一であるとのことを其時知つたのである。

棺　木（柩の飯臺）



土人の墓地は人家を距る半里許の所にあつて孰れも一塊の土饅頭で中には柩の半ば朽たのが露はれたのがある芳草無心空しく古墳の上に開落するのを見るそして墓碣の建てあるのはまれで多くは何のしるしもない眞に之れ、歳月松千尺、功名土

一丘の趣だ一望千里の田園にして眼を遮るものなき場所でも此の墓地ばかりは數株の松樹や槐樹に似た木が繁茂してゐる。

八月十九日田子兄と共に牛莊、海城間の堤路を踏査せんとて地圖と磁石とをあてに道を營口より東北にとつて東高刊と云ふ所の民家に一泊した此邊は物價が廉で三十何錢と云ふ軍票を投じて鷄一羽鷄卵若干及白菜一束を土人より購ひ得て携帶する所の醤油エッキスを入れて飯盒で煮て夕餉をすましたが中々の美味であつた、かくてアンペラの上に白布の袋を着て僅に南京蟲の襲來を防ぎ畳のつかれで心ちよくも一夜

の夢を結だ、其翌廿日上夾下と云ふ村落に着たのは、かれこれ晝であつて其村端に綠蔭依々たる數株の楊柳の下に井あり馬に飲ふべく殊に休憩に適當なる白楊製大木筐の今しも出來あがつたばかりのがあつた田子兄は逸ちはやく之を見つけて此所にて飯を喫すべく發議した余は直ぐ之に贊成を表して携帶行糧は忽ち馬丁によりて鞍嚢より此新函車上に運ばれたのであるすると食事の最中三五の村人は屋内より出て來て大人(ダイレン)々々と呼び倣して恭しく生等に目禮し笑を含で何にやら語り出でたのであるが不懂(ブトン)々々更に要領を得なかつたので紙と鉛筆とを出して可以筆談(ビーシタン)罷を

やらかしたすると其内の一人多少文字を解してゐる者が筆記した筋は大要下の如し「此箱は棺木と稱して人の遺體を納むるもので、此れは此家の老人が死亡したから今工人を値ふて製作したのである」と之を聽た田子兄の驚き方が大變で大事な糧食を放擲して桑原々々其席を飛びのいたので日頃の沈着にも似ず其狼狽が餘程滑稽であつた是等を指して噴飯と云ふのであらふ僕へなぶりて曰く、

おもひきや遼東(兩刀)さして來た武士が
ひつぎの上にまゝくはんとは

土人の厨中具は我が國の太古に似たり

木材の不足により寒氣强きに拘らず臺所道具に桶類を所持して居るものが稀で間々我國の玄蕃と云ふやうなものもあるが、多くは柳條であんだ底の圓かなる籠を以て釣瓶とも手桶ともしてゐる、水を貯へ、黍の粥油を釀すには皆素燒の甕で、釉藥のかゝつたのはまれだこれが祝瓶の昔をしのばれるの一で其二は手杓の代りに瓢(ヒサゴ)と云ふものを用ふ、之れは匏の切斷したので最も重用缺くべからざる要具の一で時としては椀や

重箱や皿鉢の代理をも勤むるもので汎く行はれてゐる、そこで我國丹後風土記を案ずるに天村雲命靈泉を懇田に灌ぐのくだりに眞名井の傍に天吉葛（アヂキカヅラ）（ひさご の古名）を生ず、其匏を以て眞名井の水を盛り神饌を調度す云々と之れ古昔我國瓢を杓として使用したる證にして不圖も太古の如しと感じた譯である。

又我が今戸燒の金魚鉢の如き平びつたい燻燒の陶物で洗面器にも食物入れにも雜巾桶にも婦人の便器にも使用してゐるものがある、此便器を知らずに徵發して陣中炊事場逼ひの飯櫃代りに使用した滑稽談も隨分あるらしい。

滿州婦人風俗

男女の服裝は全然漢化してゐて滿洲特種の風習は認められない、されど婦人の髮の結ひ方の如きは南の方金州地方と北の方遼陽方面とは大に其趣を異にし足も北方に行く毎に次第に大きく中には更に自然の儘なるが如きものさへ見受けた、其等のことは專門學者の歷史眼や人類學上の研磨を遂げたならば高勾麗民族や其他の關係に趣味ある資料を有するかもしれぬのである。

活きた人形の山車（だし）

八月廿五日大山總司令官閣下が大石橋なる某兵站部營舍に一泊せられた夜さ、土地の藝人が何にがな陣中のうさをなぐさめんとの催しでがなあらふ俄に笛太鼓の聲がしたから出て見ると、我が東京の山車によく似たものが來た、夜目に人形と見たのは眞の人間であつて、其服裝は所謂三國志的の武裝をした五六人の武者に擁せられて其武者の腕の上や槍の先きに、恰も是れ毛鬚西施も面を耻ぢ絲樹青琴も鋭を掩ふべかりしと云ふ樣な頗ぶる的の美人の目ばたきもせず殆んど一時間餘の長き時間を活人畫的態度を以て佇立して幾多の人夫に昇かれてゐるのには少しく驚かざるを

得なかつた、殊に先供が大平高足とか稱する踊で一本齒の長き履物を穿ちて(竹馬に乗る如き樣なり)滑稽踊も一寸妙であつた、きくならく此の大石橋の地這般の藝人が多く往で居るとの事である。

芥子の花と阿片

五月二十六日蔡家屯の民家を發して亮公店、河口等を經て金州に到る未だ兵站の線路と云ふものも充分でないから、地圖と磁石とをあてに金州の南方に魏然として聳えてゐる大和尚山(一に老虎山)に見當を着けて十二里の行程(日本里程)を單騎でどうやら行つたので

ある。

過きる所の村舍に間々芥子畠を以て繞らしたものがある、時正に花候に屬し妖紅紫白氈を布きたる如く中に妙齡の婦女三々五々立ちて花を折るに似たり、楊妃乎飛燕乎花と嬌を爭ふ、若し柳北翁をしてあらしめば「春宴折花應妬花、寧知命薄似殘葩、濃香未散美人手、蜀道已看天子車」と云ふ樣な名唫が馬上で以て續々と吐出すであらふ、悲哉僕には、そういふ餘裕や素養のないのを慙ぢたのである、然るにだ、焉んぞ知らん織手花を折ると見しは、熟せざる罌粟に刀痕を入れて、其より流出する汁をとりて、阿片烟を製すので、到處の喫烟小屋に横

臥する痴漢をして精神恍惚昏眊の怪夢を貪るの料とならんとは、興は忽ちさめはてたり。

蠅と拂子

五月の蠅と書きてツルサイと讀したのは誠に尤であると感じた、六月の中頃より次第に殖ゑ來り七月に到りて倍々多きを加ふ、其猛烈なることは想像の外で、食事の時には炊事掛より受取て來る炊ぎたてのあつき飯に蠅は無遠慮に襲てきて胡麻鹽を散らしたどころでなく眞黑に隙間もなく群りたかる有樣を見てはさすがの僕も始めは飯が喉へ通らぬ程であつた、其頃は

普蘭店の車站にある驛長の部屋らしゐ白壁の洋館に宿營して居た、床板や扉は皆な土人等が取去りて殘りなく、あけばなしてあるから黍稈を床としアンペラを扉としたのである、すると火とぼし頃には、白壁の天井はいつも黑色に變じて毫厘の空隙もなき迄に蠅がとまるのである、苦しまぎれに之が驅除の方法を案出した、金巾の布きれを綴合せて袋を作り

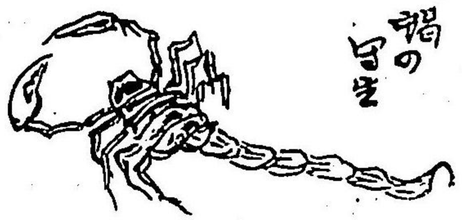
其口に電信線の切れはしを輪に入れて棒の尖頭に括り着けた、此武器を以て、頑童の蟬採りの如く毎晩天井を掃一掃するのであるが、すると袋の内にはいつも一升や一升五合の收獲が容易の業で、其爲め翌日の晝前は稍蠅が減るから仕事をするのが、幾分か樂であつた。支那人の商賣に抜目なきは今更驚く譯でも無きが、到る所の露店や荒物屋に迄白き馬尾の毛を束ねて一寸小奇麗に作りたる數箇の拂子を店頭に鉤してある、これは言ふまでもなく我將校兵士の蠅軍を追拂ふ武器として販賣するのが目的だ、於茲余も店頭に佇立して這個多少錢(トウシヤウセン)とやらかしたるとやつは五十錢(ウーシウウーセン)とぬ

かしたから、此方もまけずに、太貴々々(タークイタークイ)二十五錢(シウウーセン)まける宜しいなど覺束なき清語をあやつつて一本を終に購ひ歸つた、宿營にありては左手(ひだり)に拂子を持ち右手(みぎて)に筆を援り、又出でゝは鞍上ゆたかに馬の腹背を拂ふと云ふ樣な次第で驅蠅には陣中唯一の武器であつた、顧ふに我國の拂子は千手經に「若爲除身上惡障、難者當手白拂」とあるを眞に受けたる僧具の一つであるが、達摩大師も維摩居士も其實を穿たば蠅を拂ふに所持せしや疑ひなし、和名抄に白拂は波閉波良飛(ヘハラヒ)なりとあり、されば、我が古昔も如上の必要ありたるやあけし、高美純潔なる我鄉土、遂に此器を用ふる所なく僅に僧具の一と

て今日に存せしむるは豈こゝちよき事にあらずや、かくて滿州に於ける蠅群は十月に到りて著しく減じコロリ〳〵と自ら斃れんぬ。

蝎と南京蟲

蝎と云ふ蟲は吾人が從來から蛇蝎の語を能く口にして居るから皆人が用心する、そこで小生が觀たのは金州で一度海城で一度都合二回であるが何れも小さな方であつて幸に害を受けなかつた、此の蟲は土人の屋内石や煉瓦や泥土を以て造られてある壁や天井の間際或は龜裂してある間に栖息して居るらしく、突然座



して居る頭の上や寢て居る足の先きに落ちてくるのです、唯人體に觸れたのみでは害を加へないらしい、手を以て敲いたり、之を捕へるとすると忽ち尻の尖にある針で刺すと同時に毒汁を皮肉中に注入するから早く「アンモニヤ水」の樣なものを刺した所に塗りて其局部を紐か何にかで、結び留き直に醫師に治療を乞ふのが肝要である、もしも手後れになると全身に毒が廻りて大患となるとの事である、兎に角其蟲に觸れたら、すぐ、手巾でも鉛筆でも座右にあり合

せたもので拂ひ除けるが一番よき法であると思ふ、それから此の蝎の和訓スクモムシとしてあるが、顧ふにスクモ蟲は辭書にも桑樹中にありて木を食する一種の蟲とあるから、遠ふらしい、動物學上の「Scorpionidea」はサソリ即ち蠍と云ふ字を書くを當れりと思ふ此の名稱及文字を土人に訂さなかつたのは遺憾である、江湖博雅の君子に示教を乞はんとす、又古來漢方醫は蠍梢と稱して藥種に用ゐたとのことである。

南京蟲(臭虫)は六七月の候より盛んに吾人を襲ふので、壁と云はず床板と云はず、又獸皮やアンペラの内に栖で居て溫床の上にでも寢ると四方八方より襲來して

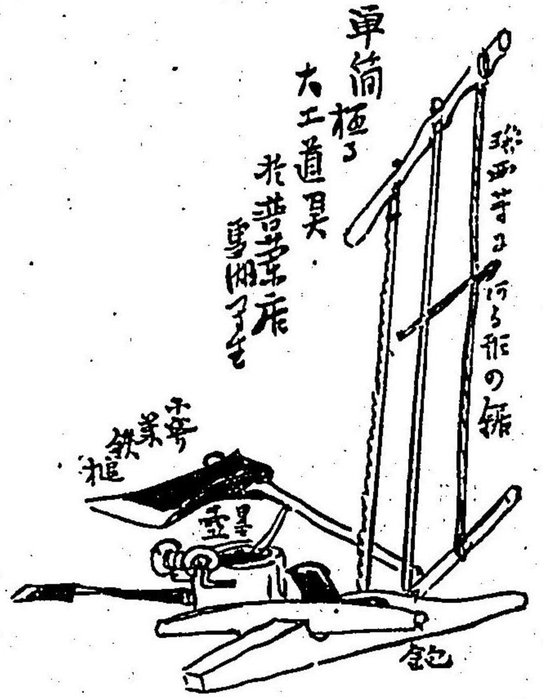
所きらはず蝨してあるく、生の如きは幸ひ刺されても蛋が食ふた程にも思はぬが、毒氣の自身にある人の如きは蝨した蹟に膿をもつてきて、切解治療をさへした人々か多かつた、されど一度蝨さゝれて困難を經るときは其後は免疫ともなりたる如く當初程の難儀に罹らぬと云ふ、土人の一向平氣なのもこれが爲めであら、ふ、此蟲に對する旅行家の豫防策は全身をゆたかに容るゝ樣な金巾で大袋を製し其縫目にはミシンを懸けて蟲の侵入を防ぐ事とし此内に體を入れ、單に首のみを出し枕の近邊にノミトリ粉を散布して寢るのであ、るかくするときは臭蟲を防ぐのには最も良法である、

余が實驗から出たのだから確なことを保證する。

大工

概して云ふときは其技拙劣にして悠長なり鋸、鉋、墨壺、鑿、手斧（鐵槌にも代用す）の外所持せず、されど鋸、鉋、手斧、等の孰れも歐風にして就中鋸の如きは全く瑞西等にて使用するものと同一式なりとは少しく意外と云はざるべからず、併も拙技と相照して極めて妙なるを覺ゆ、或時普蘭店に於て某兵站部の糧秣倉庫を急設せんとし俄に多數の支那大工を召集せし事あり、四方八方より蝟集し來る所の大工は各一箇の手車に右の道具と食物

袋とそして異臭鼻を穿つてふ寢具即ち襤褸の毛布毛皮の類一家の財產を提げて

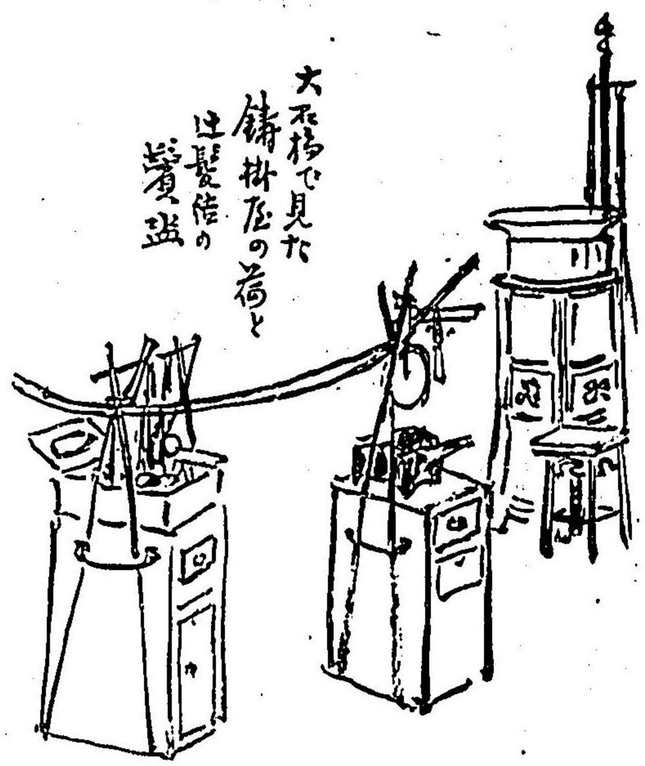


輓き來る車の輪の軋しる音はキイ〳〵と齒の根も浮かんばかりのいやな音なり此小車は荷物の運搬に使用す

るものにて小量のときは一人にて曳くも最早二十貫位のものなるときは綱曳一人を增すなり、余の大石橋より營口に赴く途中此車の三四十輛連續し來るに遇ひて其轢聲に乘馬の驚き逸し既んでの事落馬せんとせし事ありき。

鑄掛師

いかけやの天秤棒とは昔の江戸氣質を諷刺したるもののみと思ひきや、こゝにも亦其出過ぎたる天秤棒を見んとは、其荷の江戸前なるに似ずイカケデウマイヤ



ーと言はずして我國の蟲賣の如く釣下げたる鉦のカランカランにて鑄掛師の來るを知らずにてあり

き。

饅頭うり

通行の兵士や輸卒の作業場に於て土人の小孩（シヤウハイ）が饅頭を玉子等を柳條にてあみたる提籃に入れ糖饅頭々々と呼びなして賣りあるくもの多し、製法は我朝のものと略同一にして只異なる所は餡にあらずして黒砂糖を入れある事なり食するに堪へず之を中央より切斷するに凹の如く半月中に砂糖の餡は一字の如しされど其かのはの如きは内地製より却つて佳き物あり余一日遼陽城内の料理店に到りしことあり傍にあ

る清人の客は皆一様に酒肴と共に必ず饅頭を置くこと恰も洋食のパンに於ける如し其他到る所の一膳飯屋の如きもの茶店、露店にて苦力（クリ）（勞働者）等の辨當として飲食し居る等中々に需用多きが如し又饅頭屋の看板に中秋の文字あるは我國の菓子最中（モナカ）と月にかたどりたる名の同じきもおかし。

大槻博士の言の海にマンヂユウは元代の音かとあり（彼の地にてもマンドウと云はずしてマンヅにて通せり）按するに饅頭の我朝に傳はりしは京都建仁寺の龍山禪師入宗せしとき林和靖の末裔林淨因なるもの弟子となり元の順宗の時（後醍醐天皇の朝）龍山歸朝に當り林淨

因も相從ひ來り性を鹽瀬と改め饅頭の製法を傳ふ所謂奈良饅頭の祖なりと云ふ今の東京の菓子屋鹽瀬家は此の裔にして古き印と看板とを傳へしと云ふことは聞きたることありしがよくは知らず職人盡歌合まんぢううりの言葉に「さたうまんぢう、さいまんぢう、いづれもよくむして候」とあるより考ふるに我國の餡も小豆にて製したるは稍下りたる時代のものにて昔は砂糖のみを入れしものと思はる元の版圖は其の始め遼東、內蒙古、外蒙古、支那、東部等を直領せしと云へば滿州に饅頭多きも蓋し故なきにあらず。

本草綱目に饅頭小麥麪和以村醪澄底濃厚者爲之

謂之籠炊輕鬆遍口とあること能く當れり。

五月の節句

我六月十八日鹽大澳の海岸にある蔡家屯と云ふ民家に宿營してありしに居民は每戸簷頭又は門の屋根に青葉の枝や蒲艾の如きものに紅紙箋を着けたもの或は黍からの小人形に赤き衣を着せたものを幾箇となく鉤す之れ則ち懸艾の佳晨なるべし又小供等は左方の胸邊に紅き小切を同じ色の絲にて飾りたるを佩び居たり而して粟にて拵きたる三角形の薄きのし餅を製す家主之を余等一行に贈りたり所謂金色角黍なる

もの乎老幼等一日の娯樂を爲せり之を土人に尋ぬるにゴロゴロンと云へり一丁字を解するものなき片田舍にして、その筆談の効なかりしが荆楚歳時記に五月一日を端一となし二日を端二三日を端三四日を端四五日を端五とすとあるから呉音の五端と云ふ義と解したのはちとこぢ附かもしれぬ。

因に云ふ我國にて五月五日を佳節としたるを遠く仁德天皇の御代よりの事なりと云へば此時代に於ける韓土の交通によりて唐代の風習我國に傳來せしもの乎藤原兼良(應永年間)の公事根源にも五日の節會、天皇武德殿に御宴會を行はれ群臣に酒を賜

ふ(中略)人々皆菖蒲のかづらを懸く日陰のかづらの如し、典藥寮菖蒲の御案を奉る群臣に藥玉をたまふ、五色の絲を以てひぢにかくれば惡鬼を掃ふ云々、又粽(チマキ)は楚の屈原が五月五日泪羅(ベキラ)江に投じて死せしを國人悯みて此日は竹筒を以て米を貯へ水に投じて祭りしより漸く轉じて絲糸及棟葉に粽を包むに至れるよし或る書にあり此儀式は明治六年より廢れたるものなり。

中秋の月

我九月二十三日遊陽城外の宿營にありて中秋の月を

賞す城内は朝より業を廢し每戸都を降して戸外に出るものなし平常の繁華に比して恰も別郷の感あり晩餐は各分に應じて頗ぶる的御馳走をなすと云ふ城外に高塔あり所謂白塔是なり高約二百尺全部磚瓦を以て築造す老子の所謂九層の臺も累土より起ると云ひし如く其工事の如何に宏大にして幾多の月日を費したるや知るべし其時代を詳せずと雖も磚製の佛像天女迦陵頻の如き、銅製の鐸の如き（鐸の鈴あり後世補ひたるものなるべし）古雅と云はんか壯嚴と云はんか縱ひ金遼時代にあらざるも宗末元初に下らざるべし。しかも暮靄の之にかゝりて月は朧に時に數行の雁が塔をかすめて飛ぶと

云ふやうな景色はまたと遭遇し難き機會である、千古其容を同うし四時其姿を改めざる玉兎も時と所と、そして其境遇とにより自ら感懷の異るは今更說くの要なしされど余は曾て三笠の山須磨の浦、姨捨に於ける境蠻山或は北海の波濤の上に中秋の月を賞せしことゝ屢々ありといへども屠龍虎搏のあと草木未だ腥き敵の營舍跡に入り砲彈に破壞されたる層樓の破窓より此の異郷の月を見んとは豈一種の感に打たれざるを得んや。

高塔の蔭はくもれと月清み
つゝ音遠く雁わたるなり

戰地に於ける天長節と飛龍の舞

旭の御旗滿州の野に輝き我大君の御稜威普く宇内に照り渡りたる天長の佳節を戰地に於て某兵站監部の主唱にて開催したるとき我が閑院宮殿下を始めとし獨逸の皇族方や其他内外の文武官無慮五六百名が多人數一場に會して祝宴を開きたのである、其餘興には豫備廠の兵器やら分捕品やらにて各隊は思ひ〳〵の飾物をなし角力に擊劍其他種々の催がありてそれはそれは盛んなことであつた、其中に交りて土人の機巧やら手踊やらも居たのであるが、これは簡食壺將して我

王師を迎ふと云ふ樣なわけで現に此日も附近の貧民に米麥等の施與があつたと云ふことであるから我軍の溫威並行はれることが自然と表現されて居る、そこで此の餘興に繰込で來た大平飛龍の舞と云ふものが一種奇妙なもので其工合の先づ我國の獅子舞と略ぼ同一の格である、尤も我國の獅子舞も元をたゝさば、漢の諸葛亮孔明が南蠻の孟獲を攻めたとき獅子を作り腹の中へ人を入れて進退自在に働かしめ蠻夷が此方の陣に追ひやりし猛獸を大驚かせに驚かして美事追ひ返したと云ふに原因したものだと云ふことだが此の龍の舞たる、もしも孔明の智を以てしたならば我王

師を勞せずとも疾く露軍を滿州の外に追ひ返すことが出來しならんか、乃公のゐぬのが返す〳〵も遺憾千萬である、それはさて置き此の舞が屈伸自在で龍の寶珠を採らんとして狂ひ廻る働作と云ふものは我太神樂の獅子の洞入洞返と同一の樣ではあるが一層高妙で壯快なやり方である其龍の丈は凡十間もある布で青く鱗を描き其內部は鐵輪又は柳條を輪にしたるものを螺旋狀にして入れてある其輪の所々に一本の柄を結び着けてあつて數十人の人夫が一人々々其柄を持ちて高低左右蜒々長蛇の波を蹴り雲に乘じて飛動する狀を演ずるので其頭の先にある一人は竿の尖頭

にはりこの玉を附たる物を持つて之を振り龍は此の玉を採らんとして舞ふので中々面白きものであつた。芝居のことは常に其報を傳ふる人多くあまりにめづらしき感をも生せざりしかば別に記るす程のこともなし。

茲に我國のチョボクレと全く同じ節で四つ竹の如き折木を敲きて大道に錢乞ふものあり元來我國のチョボクレの出所詳ならずど雖も博奕を樗蒲と稱するは、もと胡語なりと云へば此名蓋し胡地より傳はりしものにて或は我元龜天正に於て盛に渤海に跳梁したる八幡船や海賊衆が面白半分之が曲折節づけをして內

地に傳へたる名殘ではあらざるか博識の教を乞はんとする所なり其他露店の熱鬧に於ける機巧師賣卜者、苦力の大道博奕等數へ來らば其風俗の我國維新前に於ける大江戸の有樣に似通ひたるもの一にして足らずされどあまりにくど〳〵しければ風俗談はこれにておきぬ。

雜感

○支那の經濟が早くより發達した事は歐米の學者間にも既に異論がないと云ふことで彼の夏の禹が(西暦紀元前二千二百年代)錢を創始したと云ふ傳說には

威服してゐるらしい、漢の高祖が秦の貨幣の重くつて不便なりとし莢錢則ち輕き錢に鑄換へたなぞは、すぐい腕前である而して元來支那には貴金屬の乏しい國であるから通貨には古くより銅錢(銅、錫、亞鉛、の混合物で所謂青銅(カラカネ)の圓周方穴で我寛永通寶的の形)を使用して居るので、現に滿州で日常の小買物に多く使用されてある二種の銅貨は甲が徑六分厚三厘目方五分乙が經四分厚二厘目方二分で計算にも取扱にも極めて不便のものだ、されど其個人間の信用と云ふものはおそろしいもので、遼陽や海城で土人の買物をしてゐるのを實驗して見たが、其の粟粒(つぶし)大の銅貨を(甲は四箇に

て一錢乙は十箇にて一錢と記憶したが或は違ふかも知れぬ壹錢づゝ紙に包みて(恰も散藥包の如し)封をもせずに受渡をするのである又少しく金高のものは其地の大賈の小切手樣のもの(それも極めて麁末で)を以て紙幣の如くづん々々支なく通行してゐるには實に感服した、其の片田舍でも軍票を占領の日から心よく受取て金樞部の役人に引替を申出るものゝ尠ないのも道理だと思ふた、之れは單に個人的信用發達ばかりでなく明時代でも戸部尚書は一貫とか伍百文とか云ふ樣な紙幣則ち大明通行寶鈔と云ふ紙幣を盛んに發行して使用せしめた、もしも贋造する者があれば斬に

處し其告捕をしたものには二百五拾兩の賞金と犯人の財産とを擧て之を給し以て取締たと云ふことで清の時代になつても時々此種の紙幣を總督より發行するので現に我印刷局でも南部の方面より注文を受けて製造したかの噂を耳にしたことがある、故に紙幣に對する觀念も自然に薫陶せられたのでもあらふ、兎に角經濟的頭腦は、往來で一文づゝ錢を土間に並て勘定をしなければ受渡をせぬと云ふ狐疑と隱險とに充たされてゐる韓國人の頭腦とは到底比較にならぬので、其信用制度の發達と云ふ事に就ては遺憾ながら我國人も一歩を讓らねばなるまいかと思はれるのである。

○沃野千里、養蠶、牧畜、殖林、鹽業、曰く何算し來らば吾人の爲すべき農桑の業甚だ多からん、余は戰勝國民として此沃野を拓殖すべき義務あるものと信ずると同時に徒に酒保的業務や一時的暴利事業にのみ着眼して渡航するもの多く着實能く遠大なる事業に耐へ土人をして、威服、感化以て指導するの人なきを悲む。

商品としては世計の低き人烟の稀少なる、到底多額の輸出ありとも認めざれど、去りとて多少の望みなしとせず、余が上陸當時に於ける、青泥窪、金州、復州、海城、遼陽、營口等各城市に於て眼に觸れたる物品を擧ぐれば、

(一)村井製の「ビーコック」函の中に支那美人の寫眞

紙を挿入し且つ烟草に多少の興奮的藥品を加味したる等專ら土人の嗜好に投じたるもの(百個入一箱貳圓內外)。

(二)マッチ　之は普通關西地方より上海に輸出する各種の輸出向商票あるもの(芝罘より營口を經て到る處にあり)。

(三)茶碗　之は多く名古屋燒と思ふ其形ち大なる珈琲茶碗の如く片手附のものにして恰も名古屋停車場にて茶碗蒸を入れて賣るものと同一なり紙は銅版の山水畫其價は二十五錢とは驚くべし。

(四)朝日ビール　是は大石橋、金州、復州、等にありしが壹瓶八十錢前後にして未だ酒保等の輸送品充分ならざる時であつたから其價の貴きにも拘はらず軍人間に能くうれて忽ち絕えたり之は思ふに土人の用にあらずして露國等外人の需用に應じて販賣したるものなるべし。

(五)硝子の鏡及硝子紙の額(風俗畫や山水を描きたるもの)。

(六)岐阜提灯　之は靑泥窪及柳樹屯の雜貨店のみにて見たのみであるから露國人の需用に供したるものなるべし。

以上は本邦の製品であるが一葦水を經つる我島帝國の商業程誠にあはれはかないものはない更に眼を轉じて外國品は如何と云ふに到る所の市街に散見するものは、

(一)琺瑯燒の茶碗にして日本製品第三に擧げた名古屋製の茶碗と同一の場合に使用するものであるが之れが多く花鳥模樣を着色にして且金の線を入れてある恰も七寶かの如く清人の嗜好に合ふ樣に出來て居る此價格は壹箇三十錢乃至四十錢位であるが陶器に比して極めて丈夫であるから土人の嗜好に適して居るらしゐ

其同一種のものは我農商務省の商品陳列館にも清國需用多きものとして出て居るから一般に行はれて居るものであらふ其他に琺瑯燒の食器等も間々ある。

(二)武力製盆　之れは上下の二種ある一はイナメルで塗て支那風の繪を前と同樣七寶まがいに描きしものと一は我國でも武力の手遊等に應用してある樣に繪を印刷して其上にニスの類で塗たものである甲が二十五錢なら乙は十錢と云ふ樣な差である。

(三)武力製の洗面器　之れは土人の厨中具の所で

陳べた我の今戸燒樣のものに代るものでペルス。機械で打拔たものだ其形ちは日本で以てよく亞鉛鍍金をして販賣して居るものと同種であるが武力丈に極めて輕く付價は僅に十錢位だ、故に今戸燒樣のものより丈夫だから需用がある。

(四)金巾、及キャラコ等は之れも多少の需用があるらしい其他露西亞更紗木綿(多く獨逸製)等である。

(五)コンデンスミルク、ビスケット、パイナップルの鑵詰、ロシヤ卷烟草是等は到る所の車站に市街迄にあつて從軍者に便利であつたが土人の需

用にあらずして旅行外人の用に供したものであらふ。

右の如き物品は其一部は青泥窪を經て散布したものもあらふが其過般は上海、芝罘より營口に輸入し更に遼河の水運によりて奉天鐵嶺にまで瀰漫するのである、而して其製品の大部を占め居るものは獨逸のもので膠州灣に於ける獨逸の商業策と云ふものは實に北清に於ける我商業界の勁敵として寒心せねばならぬものではあるまいか。

其他土人の日用品として需用ありと認むるものは、

(一)木綿類殊に丈夫なる緋色脫色等のなき淺黃木

綿其他喜の字つなぎや、蝙蝠模様の中形類（模様は最も清國に適するべかりし）は撰ばざる遼陽や復州で大きな吳服屋に行きて見ると黄木綿の間屋かと疑ふ様で眞に感じたのみである人は押て淺黄木綿

(二) 陶器　滿洲には素燒窯は到る處にあるが釉藥のかゝつたものを製する所はない様で、多く南支那から輸入する極めて破れ易き薄手のものばかりである、茶碗は染附又は色畫もの土瓶は朱泥、水瓶、味噌瓶等は多く素燒であるから之を我常滑燒の如き水瓶、丈山、相馬等の丈夫な磁質の燒きものを土人の嗜好に投ずべき模様を附けて輸出したら北支那には必ず向くだらふと

思ふ。

(三) 紙類　之れが極めて麁惡である假令ば土人の家屋には障子が多くあるが雨戸がない之に二番唐紙や蓆紙の様なもので貼てあるから之に適する様な紙、又壁紙、錦箋紙、紅紙の類延ては日用々紙の類迄も需用あらふ。

(四) 印刷物是れが前にも述べた通り、立春大吉、や五福集來壽の摺物も隨分需用多し。

(五) 扇子是は二十七本骨と云ふ様なもの一本の價低きも五十錢を投ずるもので、それが風習上一般に持て居る苦力頭でも中々に上等のものを

所持して常に振り廻してゐる。

右の如きまだ研究したならば澤山あらふと思ふから、遠き歐米につまらぬものを輸出せんより近き清國に自ら出張してドシ〳〵丈夫な確な商品を販賣したならば需用は倍々多きを加ふのは信じて疑はぬ所である、確實なる我島帝國の商工家に此の勇氣ある人の或はあらぬかを疑ふのである。

滿州畫韻終

滿洲畫韻奥附

明治三十九年五月七日印刷
明治三十九年五月十日發行

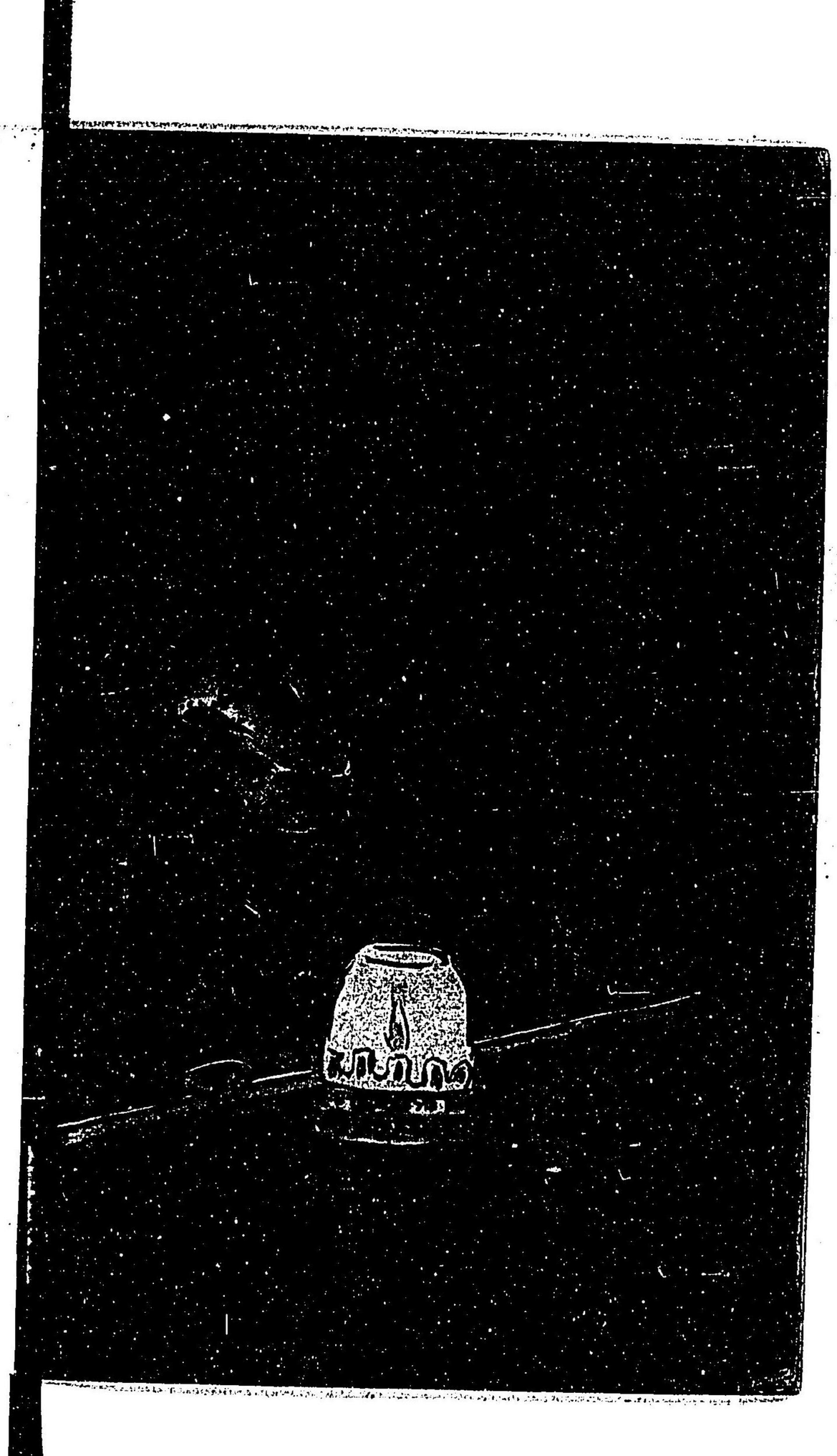
著作者　樋畑雪湖
發行者　東京市小石川區戸崎町四十六番地　大橋省吾
印刷者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　本間季男
發兌元　東京市神田區表神保町三番地　文武堂

正價金貳拾錢

不許複製

發賣元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
發賣元　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
特約大賣捌所　大阪盛文館　吉岡平助　名古屋　川瀬代助

97
353



97
353